

異文化コミュニケーション

NEWSLETTER

No.1
April 1988

KANDA UNIVERSITY OF INTERNATIONAL STUDIES
Intercultural Communication Institute

神田外語大学・異文化コミュニケーション研究所
〒260 千葉市若葉1-4-1
(phone) 0472-73-1233

発刊にあたって

異文化コミュニケーション研究所
所長 古田 暁

今回、私どもの研究所で「異文化コミュニケーション・ニュースレター」を定期的に出すことになりましたので、一言御挨拶申しあげます。本研究所が所属する神田外語大学設立の構想は10年以上前に打ち出され、具体的準備は4年前に始められましたが、その基盤に文化と言語を結びあわせて真の国際人を養成し、それに必要な研究、教育を行うという考えがありました。すなわち、異文化コミュニケーションこそ本学の理念であるといえましょう。

しかし異文化コミュニケーションは表現は新しいが、決して現象として新しいものではありません。プラトンの作品でソクラテスは常にアテナイ以外の文化と慣習に触れており、彼が対話を重んじたのはペロポネソス戦役時代の当時の社会が激変の時代にあり、他文化との接触も多く、昨今の伝統が今日否定され、何が真実かが常に問われていたからで、「プロタゴラス」などは今日なら異文化コミュニケーションの原則とでもいいたい要点を指摘しております。

現代社会も当時と非常に似た様相を呈しています。しかし異文化間の接触が科学技術の急速な進展に支えられて行われたために、それが有史以来の真に世界的規模のものであると同時に、余りにも準備の、そして理解吸収の時間がない状態でなされる結果となり、コミュニケーションは重大な障害にぶつかっているといえます。

社会現象としては、古い異文化コミュニケーションの科学的研究は緒についたばかりで、その方法論も確立しておらず、その定義さえも定かではありません。更に、文化というのが、文化人類学が説いて来た文化に上下はないという考え自体が否定される傾向が今日ないとはいえません。発展途上国の近代化はそれを暗示するようですし、また文化と文明の区分についてもより学問的検討が必要です。そしてコミュニケーションという事象自体について、西欧以外の文化圏でいかに行われて来たか、その研究の重要性は増大するばかりといえます。

そこで当研究所ではその研究・教育活動の一環としてニュースレターを刊行し、広く一般の読者、専門家、研究者に、この分野の現状、研究活動、はたまた研究者、研究書などの紹介を行わせていただき、当研究所とともに本ニュースレターも上記諸氏との出遭いと共同作業の場となることを心より願っております。

異文化コミュニケーション講演会

過去の講演内容

開催日	講演者/講演題目
1984年	
11月11日(日)	千葉市において「'84国際シンポジウム」開催
1985年	
第1回	ドナルド・キーン(コロンビア大学教授)
12月20日(金)	「世界の中の日本文化」
1986年	
第2回	内村剛介(上智大学教授)
1月24日(金)	「ソヴィエト・ロシアにおける『名誉』の論理」
2月22日(土)	千葉市において「'86国際フォーラム」開催
第3回	倉田保雄(評論家)
3月28日(金)	「フランス人の中華思想—太平洋における核実験」
第4回	岡部朗一(南山大学教授)
4月25日(金)	「文化とコミュニケーション」
第5回	ピーター・ミルワード(上智大学教授)
5月16日(金)	「言葉の世界の人間関係—シェークスピアと近松」
第6回	久米昭元(神戸市外国語大学助教授)
6月27日(金)	「なぜ名古屋はオリンピック誘致に破れたか」
第7回	井上宗迪(丸紅調査情報部部長補佐)
7月11日(金)	「日本の会社と西欧の会社」
第8回	石井 敏(大妻女子大学教授)
10月24日(金)	「義理と人情—日本、ハワイ、グアムの比較」
第9回	本城靖久(立教大学講師、エッセイスト)
11月14日(金)	「アフリカの虚像と実像」
第10回	石田友雄(筑波大学教授)
12月12日(金)	「今日のユダヤ人、昨日のユダヤ人—ユダヤ人は世界をどう観るか—」
第11回	Eric Sackheim(エリック・サックハイム)
5月15日(金)	(山陽スコット社副社長) "Foreign Business in Japan" (英語による講演)
第12回	村山元英(千葉大学教授)
6月12日(金)	「価値観・東と西—富士山ニッポンとマニラの夕陽」
第13回	牧野信也(東京外国語大学教授)
7月10日(金)	「イスラム教はなぜ理解しにくいのか」
第14回	佐伯 胖(東京大学助教授)
9月11日(金)	「異文化を理解するということ—認知心理学の立場から」
第15回	アリフィン・ベイ(神田外語大学教授)
10月9日(金)	「愛する日本への提言—在日東南アジア人の立場から」
第16回	山下秀雄(財)言語文化研究所主任研究員)
11月13日(金)	「外国語としての日本語の世界」
第17回	板坂 元(創価女子短期大学副学長)
12月11日(金)	「アメリカにとって“フェアー”(公正)とは何か」

アメリカにおけるコミュニケーション研究の 動向とその広がり (1)

神田外語大学 野村 直樹

異文化コミュニケーション学という学問分野を最初に開拓したのはアメリカのスピーチ・コミュニケーションの学者達であった。1970年代に入り人類が今までになかった規模と頻度で自国外の人々に接する機会が増加したことに伴ない、異文化接触に関するもろもろの問題が表面化した。これら一連の問題は多岐に渡る人間の行動及び、滞在様式によっても種々である。例えば外国旅行、留学、海外出張、海外赴任、外国における共同研究、外交官レベルの折衝、他国への移住、等々。これらの人々は家族を伴って異国にやってくることもあり、異文化適応の問題はますます複雑を極めてくる。一国内に問題を絞ってみてもその中の異民族同士のつばぜり合いを無視することはできない。アメリカでは少数民族の問題は国全体の統一をゆるがすものとして脅威であるし、日本では日本人と在日韓国人・北朝鮮人の間に微妙ではあるが以前から続くある種の緊張感が存在する。また国際結婚をした人々はそれなりに問題を内包していて各々の習慣から来る避けがたいギャップに取り組みなければならない。また文化人類学者は異文化における長期のフィールド・ワークを行なう訓練を受けているものの、時として現地の情報提供者との間で誤解を生じる。

このように異文化コミュニケーションが問題とする範囲は多岐に渡り、トピックも複雑になる。従ってその研究にはコミュニケーションのみならず文化人類学、言語学、心理学、社会学、政治学、そしてまた宗教や哲学からの学際的アプローチが必要であろう。

この一連のエッセイシリーズでは、何人かのアメリカでの人間同士におこるコミュニケーション(social interaction)を扱った研究者の考え方や業績を紹介することによって、異文化コミュニケーションという分野の扱える範囲と可能性を広げるのに役に立てればと思う。この分野の研究を進めるにあたっても過去に行なわれたsocial interaction 研究の足跡をたどり、それらの理解に努める必要があるだろうし、それで初めて今日のテクノロジーの変化や生活習慣の変化から来る新しい諸問題を研究視野に入れることができるだろう。このエッセイにおいては、コミュニケーションの問題をFace-to-face の状況でおこる人間同士のやりとり(social interaction)というふうに限定して話をすすめてみる。ジャーナリズムやマスコミとしてのコミュニケーションはこの場合一応除外して考える。

まずアメリカの社会科学に大きな影響を及ぼし、コミュニケーション理論の構築に貢献したグレゴリー・ベイトソンのアプローチや理論から始めたいと思う。

グレゴリー・ベイトソン (Gregory Bateson)

グレゴリー・ベイトソンはイギリスの著名な遺伝学者、ウィリアム・ベイトソンの息子として生まれた。父親の影響もあって彼ははじめケンブリッジ大学で生物学を学

ぶがその後文化人類学へ移りニューギニアのセピック川流域に住む部族Iatmul を研究することになる。ニューギニアでの現地調査から帰り、1936年彼はNavenという本を書くが、これは今日では古典的な民族誌と考えられるが、発表当時は試作的な作品と思われがちだった¹⁾。Navenという通過儀礼やIatmul部族の日常の社会行動の分析を通してベイトソンは後のsocial interactionの研究者们にとってかけがえのない道具となる理論にたどりつくことができた。

Iatmulの男女間の性格のコントラストからベイトソンは、二種類のエスカレーションの現象に関する理論を作った。当時彼がこの理論を考えるにあたりセピック川流域を研究したマーガレット・ミードの研究結果も助けになっている。ミードによると、この流域のある部族では男性も女性も同じような行動様式を示し、また他の部族では男性が上品で誇示的で女性はいくぶんとつきにくくビジネス的に見えた²⁾。後者は一般に云われる男女の行動様式のおおよそ反対である。ベイトソンは次のような質問を試してみた。どのようにして、ある部族内では同じような行動様式が男女間に出来上ることになったか。また他の部族ではどのようにして男女間にコントラストが生じるようになったか。男女各々の行動様式を漸進的に分化に導く社会的メカニズムとは何なのか。

ベイトソンがそこで考え出した人間同士あるいはグループ同士の漸進的特殊化³⁾のプロセスというのは対称的特殊化と相補的特殊化の二つである。ここではベイトソンの云う“漸進的特殊化(分化)”という概念を「インターアクションの累積的効果からくるエスカレーション」というふうに解釈して述べてみる。

対称的なエスカレーションというのは二人の人間やグループ同士が同じような抱負を持ち同じような行動様式を持っている場合、インターアクションの継続は相互競争、または相互対抗という形の漸進的変化の過程に入る。例えばある人が自分の自慢をする時もう一方がそれに答えてまた自慢話をする。次第に競争的状況が生じ一方の誇示が他方のそれ以上の誇示を呼ぶという形になる。男女が同じような行動様式を持つと云われるニューギニアの部族の場合は、この分類に属する。個人、グループ、社会階級、国家等間に起きる競争や戦争、ゲームの現象はこの対称的なエスカレーションの可能性を持っている。さらにこのような相互に関わり合うシステムにおいてのエスカレーションは、もしそのような競争が継続していった時、そのシステムの崩壊に至るか、新たな均衡状態に入る為システム内組織の再編成をせまられる。

もうひとつは相補的な分化または特殊化という様式である。この過程は関係する個人やグループ同士の抱負や行動の様式が似ていない。Aの自己主張的言動がBの服従的態度を促す。このパターンはもしBの服従がまたAの自己主張を呼びそれがさらにBの前以上の服従へ連なるとなる場合エスカレーションとなる。ニューギニア部族の場合、男性の上品さと誇示的な傾向は、女性の気難しくビジネス的な傾向と相補的な関係で補足しあっ

ている。カースト制や社会階級が確立してゆく過程や階級間の変化は相補的な分化、特殊化である場合が多い。

相補的なエスカレーションというのは個人またはグループの関係性が次第に方向性を持って不均衡へと進むためパーソナリティの歪みを生じる恐れがありそれは相互不信や敵対心へと発展する可能性を秘めている。

ベイトソンはschismogenesisという言葉を使ってこの二種類の漸進的分化の現象を各々対称的schismogenesis, 相補的schismogenesisと名付けた。ベイトソン自身の言によれば彼の最初の考え方は対称的な二者関係に対して相補的な二者関係というように静的であり分類であった。そして後になってこれらの関係性を形作る方向性を有したプロセスがあるはずだと考えた。彼のこの洞察が漸進的变化としてのエスカレーション、つまりschismogenesisという理論へ彼を導いた。

次号で例を使ってこの理論についてもう少し触れようと思う。もし紙面が許せば文化人類学から精神医学へ移りさらに新しい理論展開を続けたベイトソンを追ってみたい。(原文は英文)

- (1) Bateson, Gregory, 1936 Naven. Cambridge, England. (2nd ed, Stanford Univ. Press, 1958)
- (2) Mead, Margaret, 1935 Sex and Temperament in Three Primitive Societies. New York: Morrow.
- (3) 「漸進的 specialization」とは“progressive differentiation”の訳で変化や分化の現象が加速度的に進む状態を指した概念である。

データにみる“国際化の波”(1)

—外国人及び日本人の出入国統計より—

国際化が叫ばれて久しいが、日本から海外へ、そして海外から日本への観光客・留学生・ビジネスマン等の数は増加の一途をたどっている。このシリーズでは、昨今の日本と諸外国との接触・交流状況を、種々のデータをもとに様々な角度から捉えてみる。数字の解説には複数の可能性があるため、ここでは主観的な数字の解説より、最新のデータ提供を第一目的としたい。第一回目は、去る3月20日に法務省が発表した「外国人及び日本人の出入国統計」をもとに、日本と諸外国との“人の流れ”を取り上げてみる。

まず、昭和62年における日本人出国者総数は682万9,338人で、史上最高の記録となった。前年に比べ131万3,145人(23.8%)の増加で、これは円高が海外旅行に拍車をかけた影響が大きい。出国者総数に関して、その推移をみると昭和25年(8,922人)に比べ昨年は765.4倍という飛躍的な伸び率を示している(図-2)。日本人の海外旅行が顕著に増加するのは昭和39年の海外渡航の自由化以降であり、46年には100万人を超え初めて外国人入国者数を上回り、昭和55年の景気の低迷等による一時的な減少を除くとその後は急速な増加を続けている。

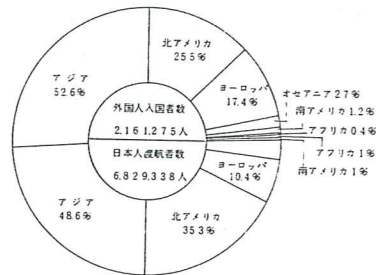
渡航先をみると(図-1)地域別ではアジアが最も多く全体の半数近くを占める。国別ではアメリカ合衆国が

最も多く全体の33.9%を占め、以下台湾11.8%、韓国10.4%、香港7.6%、中国6.1%と続く。伸び率ではオーストラリアの前年度比44.5%増、香港44.3%増が目立っている。目的別には、観光が全体の82.6%と圧倒的に多く、次いで短期商用業務が12.9%となっている。尚、男女比では62.4%対37.6%と男性が多いが、増加率は女性の方が高く、年齢別には20代が全体の27.6%と最も多く、次いで30代、40代、50代の順となっている。殆どの年齢層で男性が多い中、15才から24才の層だけ女性が男性より約30万人上回っている。

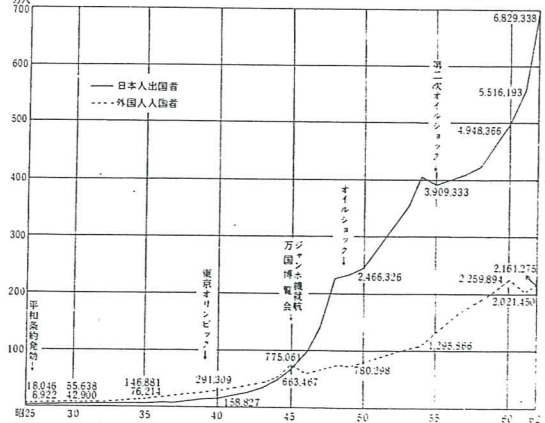
外国人入国者数に関しては、総数が216万1,275人で前年に比べ6.9%の増加。日本人出国者ほどの伸びではないものの、昭和25年(18,046人)から119.8倍の増加になっている(図-2)。地域別にみると、アジアからの113万6,710人が前年に比べ12.0%増加となり入国者総数の過半数を占めるに至った。国別には、アメリカ合衆国が47万9,891人で最多で、前年に比べ0.6%減少したものの入国者総数の22.2%に当たっている。続いて、台湾16.7%、韓国16.7%、イギリス6.7%、フィリピン3.9%、中国3.4%の順になっている。

目的別にみると、新規入国者178万7,074人(入国者総数から再入国許可を受け入国した者を除く)に関して短期滞在者(90日以内)が全体の89.9%を占め、その中でも観光が53.1%を占める。次いで商用目的の入国者が短期、長期を合わせると新規入国者全体の30.6%を占めている。その他、数は少ないが伸び率の高いものとして、歌手、ダンサー等の興行活動者の前年度比32.7%増、日

(図-1) 出入国者地域別構成比(昭和62年)



(図-2) 日本人出国者・外国人入国者の推移



本人の配偶者・子27.3%増、ワーキングホリデー該当者56.4%増、語学学校の教師26.8%増が挙げられる。性別では男性が全体の60.8%を占めている。年齢別には30代が最も多く25.2%、次いで40代、20代、50代の順になっている。尚、殆どの層で男性が多い中、15才から24才までの層のみ、女性が男性を約6万人上回っている。

法務省入管協会によると、国別、目的別の増減の理由についての詳細な分析は残念ながら行われていないとのことであるが、読者の皆様からのご意見等を頂ければ有難い。

出典：「昭和62年中における外国人及び日本人の出入国者統計について」、「出入国管理一変貌する国際環境の中で一」（昭和61年度版、法務省入国管理局編）。

研究プロジェクト活動報告

『日本企業の国際化対応』研究会

急速に進んでいる日本企業の海外進出、外国人社員採用企業の増加などに伴い、正しい意味での企業の「国際化」対応が重要課題となっている。この研究会では、世界における日本の役割を考慮し、人的側面・労働問題に焦点をあてながら、日本企業の「国際化」対応の実態を把握し「共通的」企業ビヘイビアを明確にすることにより、生起しうる問題とその解決策を探ることを目的に活動をすすめている。神田外語大学教授・加藤譲治（社会学）を中心に、メンバーは大学の研究者・企業の人事担当者・労働組合幹部の三者約10名で構成されている。昨年6月より始まり、月1回の例会をもち、現在8回目の会合を迎えている。

『東南アジアにおける宗教と政治』研究会

神田外語大学教授アリフィン・ベイ（政治学）を中心に、政治に及ぼす宗教の影響力の増大についての研究を進める。特に東南アジア諸国において、主な宗教——ヒンズー教・仏教・儒教・キリスト教・イスラム教——が、政治とどのような関わり合いを持つかを探ってゆく。

若手の政治学研究者を中心に、5月から開始の予定。

問合わせ先：神田外語大学（Tel 0472-73-1233）

アリフィン・ベイ研究室もしくは当研究所

Information Board

The Language Teacher

「異文化コミュニケーション」特集

JALT (The Japan Association of Language Teachers) のジャーナルThe Language Teacher 5月号では特集として異文化コミュニケーションが取り上げられる。執筆担当は、石井敏、平井一弘、岡部朗一、ジェームズ・パウアーズの各氏。

問合わせ先：JALT事務局 Tel 075-221-2376

異文化間教育学会・第9回大会

日時：1988年5月21日（土）・22日（日）

場所：専修大学・千代田キャンパス

問合せ先：〒606 京都市左京区吉田本町

京都大学教育学部 比較教育学研究室気付

異文化間教育学会事務局 Tel 075-751-2111(内) 3038

異文化間トレーニングの為にワーク・ショップ

講師：Dr. Sheila Ramsey (Training Director at Intercultural Relations Institute, 元国際キリスト教大学助教授)

日時：5月21日・22日、5月28日・29日の2回

午前10時～午後5時

場所：NHK青山荘（東京・表参道）

費用：3万7千円

問合せ先：クロスカルチャー・トレーニング・サービス

Tel 03-327-1866（荒木）

日本コミュニケーション学会・第18回年次大会

日時：1988年6月25日（土）、26日（日）

6月27日は大会ツアー（京都観光）の予定。

場所：同志社大学 新島会館

研究発表分野：外国語教育、異文化コミュニケーション、対人コミュニケーション、組織及びマスコミュニケーション、レトリックと演説、音声科学とスピーチ教育

問合せ先：〒142 東京都品川区旗の台1-5-8

昭和大学教養部 平井一弘 Tel 03-784-8259

第18回異文化コミュニケーション講演会

『日本における企業内コミュニケーション』

講演者：北岡靖男氏（国際ビジネスコミュニケーション協会・副会長、TOEIC創案者）

日時：5月20日（金）6時20分～8時20分

場所：神田外語学院

（JRもしくは地下鉄、神田駅下車徒歩3分）

入場料：800円

申込方法：官製ハガキに氏名、職業、年令、郵便番号、住所、電話番号を明記の上、当研究所宛にお申し込み下さい。

読者の皆様へ

ニュースレター第一号発刊の運びとなりました。この分野に関心のある皆様に対する情報提供・意見交換の場として、取り扱う範囲も留学生問題や日本語教育・帰国子女問題等まで拡げ“文化”と“コミュニケーション”を多面的に把えることの出来る紙面づくりを目指しております。皆様の貴重なアドバイスをもとに少しでもお役に立つものを創りたいと望んでおりますので、どうか忌憚なきご意見を下記までお寄せ下さい。またご存知のセミナー、推薦図書や研究等がございましたらお知らせ下さい。

〒260 千葉市若葉1-4-1 神田外語大学

異文化コミュニケーション研究所 Tel 0472-73-1233